「Mr. Roger's Neighborhood」は題名のとおり、3才～5才の幼児に対して、自負心、自分の感情に対処する能力・自制心・想像力・創造力・自分取り巻く世界への好奇心・多様性への感謝・協調性・忍耐・根気・規則や規制に従う能力など、いろいろな感情を自己コントロールすることでご近所との信頼関係を築きましょう、と教えています。前述の言葉のどれかが、番組の中で歌われる歌のどこかに、本を読んで聞かせる物語の中に、また、ブラウン管に向かってする話の中に織り込まれていました。

毎日これら3つの番組を見ていたおかげもあって、我が家の子ども達は小学校へ上がるまでには、英語の言葉の基礎はもちろん、子どもの教育に必要だと思われる要素を、目や耳からしっかりと入力されていたようです。アメリカ人の子ども達と一緒に、すんなりと学校生活をスタートさせることができました。

＜子どもの日本語環境と教育＞

子ども達の日本語教育には、英語以上にテレビ番組を見せる必要性を感じました。ですが、30年前のアメリカでの日本語放送は、週末の限られた時間でしか見られませんでした。しかも幼児に見せてやりたいものはほとんどなく、それが反って子ども達の記憶に残ることとなったのでしょう。日本語プログラムと言えば「日本昔ばなし」と「とんがり帽子のメモル」、この2つらしいのです。

先にテレビ「日本昔ばなし」から作られた絵本を読んで聞かせていたことや、それがテレビの画像とリンクされたこと、市原悦子さんと常田富士男さんがいくつもの声の役柄を使いこなす名調子での語り口、質の高いイラストや音楽は、子ども心をぐっとつかみました。一部の例ですが、昔ばなしから「干支・神様・恩返し」などの言葉を、そして、文化・風習に基づいた人間の行為やものの考え方、倫理的で規範的な道徳観念、勧善懲悪や因果関係といったカルチャーを教えられました。

「とんがり帽子のメモル」は、イラストにふんわりした優しい色彩と絵柄を使ったアニメ・ファンタジーです。宇宙人のメモルが地球人のマリエルの力に恐れたり尊敬したり、また、彼女を死の危機から救ったりして友情や信頼を築く内容が琴線に触れ、親も一緒になって感動したものです。情感豊かな言葉の語感やリズムなど、美しい日本語として子ども達へ伝わりました。

残念ながら、娘たちの幼児期にはビデオなどの便利な機械はありせんでした。もしあれば、日本の番組にも「Sesame Street」や「Mr. Roger's Neighborhood」、「The Electric Company」と同じようなテーマで作られたものがあったはずで、子どもの言葉の教育のために見せてやれたでしょう。

＜小さな環境、大きな収穫＞

我が家の子ども達はみな海外で言葉を覚え始め、日・英両方の言語を同時に学びました。英語を学ぶための条件は、家庭以外ではアメリカの子ども達に比べて、さほど悪かったとは思いません。それに比べ、日本語の教育環境や条件は、極端に制限されたものでした。だから、どんな方法でも、一人残らずきちんと日本語教育ができればよし、と考えました。

小学校低学年から高校生の頃までは、貸しビデオをたまに借りる以外は、ほとんどテレビ番組を見る機会がないままに大きくなりました。ですから、子ども達が見た番組もたくさんあるわけではありません。そのせいでしょうか、自分達が見たものはよく覚えています。たとえば、日本のカルチャーについて、子ども同士の話が白熱したり混乱したりすると、「日本昔ばなし」や「とんがり帽子のメモル」のエピソードを例に挙げることが多く、それでお互いによく理解でき納得できるようだと、そばで聞いていて分かるのです。そこまでの共通の価値観を、どうやって持てたのかとても不思議です。その理由は分からずとも、親が与えた小さな教育環境が、子どもを通じて形として実を結んいるところ見ると、その収穫はとても大きかったように思えます。

＜昔ばなし・メモルといえば返事が返る＞

娘たちへ、インターネットで見つけた「昔ばなし」や「メモル」の最新情報をメールすると、すぐさま「リンク送って」と返信がもらえました。最終話を見ることなく番組が終了してしまったので、子ども同士で昔ばなしに花を咲かせるのかもしれません。

（追記）

20年以上も昔に見た番組の内容を書くについては、記憶間違いや勘違いがないか、インターネットで確認しました。

松本 康子　（まつもと やすこ）

1979年、夫の留学で、1歳半の長女を帯同し渡米。その後、アメリカで次女、三女を出産。専業主婦として子育てと教育を担当。

子ども達は、親から見てうらやましいバイリンガル・バイカルチャーの大人に育ちました。しかし、「アメリカで日本人の子どもをバイリンガルに育てた」私が、実は、子どもに育てられていたのです。このコラムでは、「海外でともに育った母と子」の姿を紹介させていただきます。

皆さんの海外での子育ての参考になりますでしょうか？

番組の名前を見てみると、ひと昔前の康子さんの経験談です。子どもの教育の前に、自身のサバイバル英語のためにテレビの視聴から始めました。子どももその環境の中で育っていきました。

テレビやビデオ・DVDの子どもの教育への功罪はよく議論されます。しかし、海外での言語習得、特に第二言語や文化の習得ではクリティカルな役割を発揮します。ただ、功罪の議論で繰り返されるように、保護者の意図と目的を明確にすることが必要です。

ここで康子さんが試みたような仕掛けが重要です。